

〈研究ノート〉

新約聖書「マタイによる福音書」における 裏返し構造

James B. Jordan の図式に基づく検証

大喜多 紀明

1. はじめに

裏返し構造とは、キアスムス（Chiasmus）の構造上の下位の概念であり、異郷訪問譚の形式の物語にしばしばみとめられる構造である（大林：1979）。大林（1979）の知見を受け、依田（1982）は韓国の物語を、大喜多（2017）および大喜多（2020）ではアニメーション映画および漫画をそれぞれ対象に、異郷訪問譚にかかる裏返し構造がみいだされる蓋然性に関する検証がおこなわれてきた。これらの報告は、いずれも、かかる蓋然性の高さを支持している。本稿では、かかる蓋然性の高さを前提に、新約聖書に収納された「マタイによる福音書」をテキストとし、かかるテキストに対して James B. Jordan が示したキアスムス構造（Jordan：1997）を前提に、これに裏返し構造をあてはめる観点による構造分析をおこなうことにする¹。

2. マタイによる福音書は異郷訪問譚といえるか

一般的には、ある物語において、物語の主人公が、彼にとっての異郷を訪問する形式を持つ場合、これを異郷訪問譚と呼ぶ。勝俣（2009）は、異郷訪問譚にみとめら

1 本稿は、テキストの分析をおこなうことを目的としており、神学的な議論を目的としていない。

れる特徴について次のように述べた。

異郷訪問譚とは、現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である。訪問者は神か人間であり、異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる。また、多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることは出来ない。

この勝俣（2009）の言及をまとめると以下の①～④のようになる。

- ① 異郷訪問譚では、主人公が異郷を訪問する²。
- ② 主人公は神か人間である³。
- ③ 異郷への訪問は、特殊な手段・方法による⁴。
- ④ 主人公は選ばれた少数者である⁵。

本稿では、上記の特徴①～④のすべてに当てはまる場合、これを異郷訪問譚と呼ぶことにする。以下、本節では、特徴①～④をテキストに当てはめることにより、テキストが異郷訪問譚といえるか否かの判別をおこなうことにする。

特徴①：

テキストの主人公はイエスである。主人公は、イスラエル各地などを巡回するのだが、その目的は宣教である。主人公の故郷はガリラヤ地方のナザレであり、宣教の最終目的地であるエルサレムに行き殺害される。かつ、主人公にとってエルサレムは故郷ではない。ここで、エルサレムを異郷とみなした場合、当該物語は、主人公にとっての異郷（エルサレム）へ訪問する形式である。かかる前提に基づけば、テキストは特徴①に合致する。あるいは、キリスト教の信仰に基づき、イエスを「神」とした場合、この物語は、「神」が人間の世界を訪問する形式であるといえる。かかる人間の世界を「神」にとっての異郷とみなせば、この物語は、主人公が異郷を訪問する形式であるといえ、特徴①に合致する。

2 本稿ではこれを「特徴①」と呼ぶ。

3 本稿ではこれを「特徴②」と呼ぶ。

4 本稿ではこれを「特徴③」と呼ぶ。

5 本稿ではこれを「特徴④」と呼ぶ。

特徴②：

主人公はイエスであり、通念に基づけば「人間」である。あるいは、キリスト教の信仰に立脚すればイエスは「神」ともいえる(川村:1997)。いずれにせよ、主人公は「神」あるいは「人間」であるので、かかる点は特徴②に合致する。

特徴③：

主人公を「人間」とみなした場合、主人公は異郷であるエルサレムに訪問するのであるが、その手段・方法は徒歩によるものである。かかる訪問の形式は何ら特殊なものではない。したがって、主人公が「人間」であるという前提に立てば特徴③は合致しない。ただし、キリスト教の一般的な信仰に基づけば、イエスは三位一体の一つのペルソナ(小島:1992)であり、「神の子」という特殊な立場で人間の世界を訪問する(吉良:1958)⁶。また、処女懐胎⁷の立場に立てば、母マリヤ⁸が処女でありながらもイエスは誕生(佐々木:2019)し、かかる人間の世界を訪問するのであるから、これは、「特殊な手段・方法」であるといえるため、特徴③に合致する。

特徴④：

テキストにはイエスに対しての「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(日本聖書協会:1989)という表現がある。つまり、主人公は「選ばれた」存在であるといえる。また、テキスト中に同様の「選ばれた」立場に立つ他の人物はみとめられない。したがって、特徴④には合致する。

以上を踏まえれば、イエスが「人間」という立場の場合、特徴①・②・④に合致するものの、特徴③には合致しない。また、イエスが「神」であるとのキリスト教の信仰に立脚した場合には、特徴①～④のすべてに合致することになる。つまり、テキストは、イエスが「人間」であれば異郷訪問譚といえず、イエスが「神」であれば異郷訪問譚といえる。

6 本稿ではこれを、イエスが「神」であるとみなすことにする。

7 イエスの母であるマリヤがまだ処女であったにもかかわらず、マリヤはイエスを身籠ったとする神学的な立場のことである。

8 マリヤは「マリア」とも表記されるが、本稿では便宜上「マリヤ」で統一した。なお、本稿の引用文献である佐々木(2019)の題名では「マリア」を使用している。

3. キアスムスと裏返し構造

キアスムスとは、下記のような、要素対が同心円状に配列する構造をいう。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots \rightarrow X^9 \rightarrow \dots \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$$

キアスムスの用語は古代ギリシャの修辞家 Hermogenes (ヘルモゲネス) による (森: 2007) のであるが、形式自体は、最古の文学とされる「ギルガメシュ叙事詩」にもみとめられる (Welch: 2020) ように、古くから使用されてきた。Miller (2002) は以下のように述べた。

We can see another example of the same tension between stability and change in the earliest known “literary” example of chiasmus from the Sumerian epic Gilgamesh (ca. 3,000 BCE).

キアスムスは聖書のテキストにおいてもしばしばみいだされる (例えば、Assis: 2002)。以下は、マルコによる福音書2章27節とマタイによる福音書7章6節にみとめられるキアスムスの実例である (Wolfe: 1980)。

A B
The sabbath was made for man,

B' A'
Not man for the sabbath.

Mark 2:27

A B
Do not give what is holy to dogs, nor throw your pearls before swine;

B' A'
Lest they (swine) trample them under foot, and they (dogs) turn to attack you.

Matt 7:6

9 ここでの「X」は、キアスムスの構造上の中央部分に位置する、対応を持たない要素としての、キアスムスの「核」を意味する。

If lines were drawn from A to A´ and from B to B´ the Greek letter Che(X) would be formed. The tern chiasmus or the anglicized from chiasm comes from the Greek word chiamsos which means a placing crosswise.

上述のキアスムスは下記のように表現できる¹⁰。

マルコによる福音書 2 章 27 節のキアスムス

- A sabbath (安息日)
- B man (人間)
- B´ man (人間)
- A´ sabbath (安息日)

マタイによる福音書 7 章 6 節のキアスムス

- A Do not give what is holy to dogs (聖なるものを犬に与えるな)
- B nor throw your pearls before swine (あなたの真珠を豚に投げてやるな)
- B´ Lest they (swine) trample them under foot (それら〈豚〉はそれら〈真珠〉を踏みつけ)
- A´ and they (dogs) turn to attack you. (それら〈犬〉はあなたに攻撃をしてくる)

これらのキアスムスはともに 2 種類の要素対によって構成されており、規模としては小さいといえる。

キアスムスは、規模の種類により下記のような 3 種類に分類できる (大喜多：2022)。

- A：マイクロキアスムス (micro-chiasmus)
- B：マクロキアスムス (macro-chiasmus)
- C：書籍レベルのキアスムス (book level chiasmus)

大喜多 (2022) によれば、ここで述べたマイクロキアスムスは、ABB´A´ という小規模のキアスムスを指す呼称であり、マクロキアスムスは、ディスコースの塊にまたがる程度の規模である。また、書籍レベルのキアスムスは、物語あるいはテキスト全

10 キアスムスの図式に書かれた日本語部分は筆者によるものである。

体を覆う規模の、いわば構造的なキアスムスのことをいう。ただし、Heath (2011)によれば、かかるミクロキアスムスとマクロキアスムスの判別の基準は明確であるといいがたい。

なお、キアスムスでは、Xを持つ種類のもと持たないものがある。つまり、Xを持つものを「集中構造」や「コンチェントリック」などと呼んで区別する場合があるのだが、本稿では、かかる区別をおこなわないことにする。

続いて、裏返し構造についてである。1節で述べたように、裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位の概念である。キアスムスを構成するすべての要素対が対照的な関係にある場合、これを裏返し構造と呼ぶ(大喜多:2022)。

以下は、日本の異郷訪問譚である「イザナギの黄泉国訪問譚」にみとめられる裏返し構造である(大林:1979)。

- A 出産：汚れにより文化の神生る
- B 神発生：肉体から殺害により発生
- C 応待：友好的・内
 - D 食物を食べる：煮たもの、女神は現世に還れない
 - X 腐敗した女神を見る
 - D´ 食物を食べる：生のもの、男神は現世に還れる
- C´ 応待：敵対的・外
- B´ 神発生：外被から殺害によらず発生
- A´ 出産：汚れの除去により自然の神生る

この構造では、例えばAとA´は「出産」がテーマであるが、Aが「汚れにより文化の神生る」であるのに対し、A´は「汚れの除去により自然の神生る」であり、双方は対照的である。BとB´、CとC´、DとD´についても同様であり、各要素対はそれぞれ対照的な関係である。なお、Xは対応を持たない要素である。ここで大林(1979)によれば、Xは、物語を転回させる(つまり物語を反転させる)役割を持つ。

従来、キアスムスにおけるXは、物語におけるクライマックスを示す意味があるとされてきた(McCoy:2003)。

One scholar who has specialized in the literary form and structure of the Old Testament is convinced Genesis through Deuteronomy plus the book of Joshua (all six of which he collectively labels “the Hexateuch”) form one enormous

macrochiasm with the covenant at Sinai (Exodus 19:3–Numbers 10:10) as the central and climactic (X) component.

かつ、大喜多（2021）は、二瓶（2006）における「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わるところ」がクライマックスであるという定義¹¹を引用し、「イザナギの黄泉国訪問譚」について次のように述べた。

「イザナギの黄泉国訪問譚」のキアスムスの場合、核は、X「変異したイザナミを目撃」の場面である。イザナギは、既に変容したイザナミの姿を目撃することにより、イザナミとの対面に希望を抱いていたイザナギの心性（「高揚」）が変化し、絶望と驚愕の淵に落とされる（「落胆」）。同時に、これは、イザナギの自立を促す出来事でもあった。

そのうえで、「核の前後で「中心人物の心」が大きく変化して」（大喜多：2021）おり、かつ、当該Xが二瓶の定義に基づくクライマックスであることを示した。以上は、当該物語においては、Xがクライマックスであり、かつ、二瓶の定義に基づく「中心人物の心」が大きく変化する箇所である可能性を示している。こうしたXとクライマックスと「中心人物の心」の変化の一致が他のキアスムスにも一般的に当てはまるものなのであるかについては今後検証するつもりである。以上を踏まえ、裏返し構造については、構造の前半と後半がXにより転回し、かつ、クライマックスと「中心人物の心」の変化もXの箇所でみとめられる蓋然性が高いという仮説を提示することができる。

4. キアスムスに関する先行研究

当該テキストを書籍レベルのキアスムスの観点から分析した先行研究には Lohr (1961)、Kidder (2015)、Jordan (1997a) などがある。

Lohr (1961) はテキストを次のように分析した。

- A 1～4 Narrative: Birth and Beginnings
- B 5～7 Discourse: Blessings, Entering the Kingdom
- C 8～9 Narrative: Authority and Invitation

11 本稿ではこれを「二瓶の定義」と呼ぶ。

- D 10 Discourse: Mission Discourse
- E 11 ~ 12 Narrative: Rejection by Generation
- X 13 Discourse: Parable of the Kingdom
- E´ 14 ~ 17 Narrative: Acknowledgement by Disciples
- D´ 18 Discourse: Community Discourse
- C´ 19 ~ 22 Narrative: Authority and Invitation
- B´ 23 ~ 25 Discourse: Woes, Coming of the Kingdom
- A´ 26 ~ 28 Narrative: Death and Rebirth

Lohr (1961) によれば、テキストは、5 個の Discourse (垂訓) と 6 個の Narrative (物語) により構成されたキアスムスからなる。なお、第 3 番目の垂訓が X であり、5 組の要素対と X により構成されている。この構造の特徴は、垂訓と物語が交互に配列している点である。

Kidder (2015) は以下のキアスムスを示した。

- A Jesus's Birth and the Beginning of His Kingdom Ministry (1-4)
- B Sermon on the Mount: The Laws of the Kingdom (5-7)
- C Jesus' Authority Proven through Healings, Miracles, and the Giving of Instructions on How to Serve in the Kingdom (8-12)
- D The Parables about the Kingdom, Miracles Performed (13:1-16:12)
- X Confirmation that Jesus is the Son of God, Ruler of the Kingdom(16:13-17:13)
- D´ Parables and discourses on how to behave in the Kingdom (17:14-20:28)
- C´ Jesus' Authority Proven through the Triumphal Entry, Cleansing of the Temple, and the Telling of Parables on How to Serve and Behave in the Kingdom (20:29-22:46)
- B´ Olivet Discourse: The Signs of the Coming of the Kingdom (23-25)
- A´ The End of Jesus' Earthly Kingdom Ministry, His Death and Resurrection (26-28)

そのうえで、Kidder (2015) は次のように述べた。

Additionally, prominent in the broader chiastic structure of Matthew are the four major themes of Jesus as the Messianic Son of God, Jesus as the King, Jesus as the Suffering Servant, and Jesus' Abiding Presence. The chiastic structure shows that Matthew had intentionally woven all of the above themes together in a systematic parallelism and symmetry to show the work of God which was fulfilled in His beloved son Jesus Christ. It was the Son of God who came to be one of us, died on the cross, was resurrected for the forgiveness of our sins, and is seated as King on the right side of the Father. Out of love for all the nations of the Earth, Christ, Emmanuel, promised to be with us to the end of the ages.

つまり、このキアスムスは、「Jesus as the Messianic Son of God (神の子としてのイエス)」、「Jesus as the King (王としてのイエス)」、「Jesus as the Suffering Servant (苦難のしもべとしてのイエス)」、「Jesus' Abiding Presence (イエスの永遠の臨在)」をテーマとした構造である。なお、Kidder (2015) のキアスムスは4組の要素対とXにより構成されている。

Jordan (1997a) が示したキアスムスは次の通りである。

- A Genealogy (past), 1:1-17
- B First Mary and Jesus' birth, 1:18-25
- C Gifts of wealth at birth, 2:1-12
- D Descent into Egypt; murder of children, 2:13-21
- E Judea avoided, 2:22-23
- F Baptism of Jesus, 3:1-8:23
- G Crossing the sea, 8:24-11:1
- H John's ministry, 11:2-19
- I Rejection of Jesus, 11:20-24
- J Gifts for the new children, 11:25-30
- K Attack of Pharisees, 12:1-13
- X Pharisees determine to kill the innocent Servant, 12:14-21
- K' Condemnation of Pharisees, 12:22-45
- J' Gifts for the new children, 13:1-52
- I' Rejection of Jesus, 13:53-58

- H ´ John's death, 14:1-12
 G ´ Crossing the sea, 14:13-16:12
 F ´ Transfiguration of Jesus, 16:13-18:35
 E ´ Judean ministry, 19:1-20:34
 D ´ Ascent into Jerusalem; judgment on Jews, 21:1-27:56
 C ´ Gift of wealth at death, 27:57-66
 B ´ Last Marys and Jesus' resurrection, 28:1-15
 A ´ Commission (future), 28:16-20

このキアスムスは、11組の要素対とXにより構成されており、前述の2つのキアスムスに比べて要素対の数が多いという特徴を持つ。さらに、Lohr (1961)¹²、Kidder (2015)¹³、Jordan (1997a)¹⁴のキアスムスはそれぞれXを持つのであるが、配置された場所に差異がみとめられる。以下は、3種のキアスムスにおける、要素対の数とXの位置を比較したものである。

Lohr の図式	要素対：5	X：13章1～58節
Kidder の図式	要素対：4	X：16章13節～17章13節
Jordan の図式	要素対：11	X：12章14～21節

そもそも「マタイによる福音書」は、主人公であるイエスの誕生から、死と復活に至るできごとが描かれた物語（岡本：2007）である。一般的に、死は人生の終結を意味し、死を決定する出来事は、人生における重要な転回点であるといえる。この点はイエスの生涯においても同様であるといえる。とりわけ、キリスト教にとっては、イエスの死と復活は「中心的テーマ」（橋内：1993）であり、イエスのかかる出来事には神学的な意味も付加される。かかる神学的な意味を加味しなくても、主人公の死（と復活）を決定する出来事が描かれた箇所は、当該物語における重要な転回点であるといえる。

ここで、上述の3種類のキアスムスのうち、Jordanの図式のXは、「Pharisees determine to kill the innocent Servant（パリサイ派によるイエス殺害の決定）」であり、パリサイ派がイエスを殺害することを決定した箇所である。つまり、当該箇所は、イ

12 以下「Lohrの図式」と呼ぶ。

13 以下「Kidderの図式」と呼ぶ。

14 以下「Jordanの図式」と呼ぶ。

エスの死が決定づけられた箇所である。同時に、かかるパリサイ派の決定はイエス(=中心人物)の心に大きな変化をもたらしたと予想できる箇所であるといえ、二瓶の定義に基づくクライマックスであると仮定できる。それに対し、Lohrの図式とKidderの図式のXでは、これに対する直接的な言及はない。

以上を踏まえ、本稿では、Jordanの図式のキアスムスを前提に、裏返し構造を当てはめる観点による分析をおこなうことにする¹⁵。なお、Jordanの図式を構成する各要素対の説明については、Jordan(1997a)とJordan(1997b)で述べられている。

5. テキストの分析

前節で紹介したJordanの図式では、裏返し構造との関連についての言及がない。そこで、本節では、Jordanの図式における各ユニットを踏まえつつも、かかるユニットにおける要素対の関係性について裏返し構造の観点による再評価をおこなうことにする。

◆ AとA´

AとA´の関係については、Jordan(1997a)では次のように示されている。

The genealogy of Jesus in 1:1–17 brings us up from the past, while the commission in 28:16–20 moves us into the future. The commission should probably be compared to the commissioning of Joshua to take the promised land toward the end of Deuteronomy.

つまり、Aにはイエスを迎えるまでの系図が記されており、これは「過去」に属するものである。それに対し、A´は、「未来」への委託が記されている。かかる「過去」と「未来」への言及は対照的である¹⁶。

◆ BとB´

BとB´について、Jordan(1997a)は次のように言及している。

15 Lohrの図式およびKidderの図式におけるXの機能については別途紹介するつもりである。

16 イエスの系図は、マタイによる福音書の当該箇所以外に、ルカによる福音書にも表記されている。かかるルカによる福音書の系図においても、マタイの場合と同様の、キアスムスを前提とする対応関係にあるかは、今後検証するつもりである。

The birth narrative of 1:18–25 can be analyzed as having three parts: Mary is presented, an angel appears with a message, and Jesus is born. In the same way, the resurrection narrative of 28:1–10 presents two Marys, an angel appears with a message, and then Jesus appears in His resurrected body. (John 1:1–18 only presents one Mary, the Magdalene.)

つまり、Jordan の図式によれば、B には、マリヤの登場、メッセージをともなう天使の出現、イエスの誕生が描かれており、B´ には、2 人のマリヤの登場、メッセージをともなう天使の出現、イエスの復活という 3 種類の出来事が対比されているという。

ここで、B では一人であったマリヤは、B´ では複数となる。つまり、イエスの誕生は一人の女性によって認知されたのであるが、イエスの復活については複数の女性による認知である。また、B の天使は、マリヤにではなく、婚約者のヨセフに対してメッセージを与えた。それに対して B´ における天使のメッセージはマリヤたちに与えられたものである。さらに、B におけるイエスの誕生は、肉体をともなうものであるのだが、B´ における復活は通常の肉体をともなうものではない。以上より、Jordan の図式が示した 3 種類の出来事の対比は、すべて対照的であるといえる。

◆ C と C´

C と C´ については、Jordan (1997a) は以下のように言及した。

The story of the Persian magi in 2:1–12 also involves Herod's thwarted desire to kill Jesus. In terms of the chiasm of Matthew, the first point to notice is the rich gifts given to Jesus, which will sustain the family while in Egypt. Similarly, the wealthy Joseph of Arimathaea provides a rich tomb for Jesus while He is in the Egypt of the grave, 27:57–61. Second is the fact that the Jews prevailed on Pilate to guard the grave of Jesus (27:62–66). As Herod sought to prevent Jesus' birth, the Jews seek to prevent His resurrection.

つまり、Jordan の図式は、まず、C における占星術者によるイエスへの贈り物と、C´ におけるアリマタヤのヨセフによる死んだイエスの墓を、ともに「豊かな贈り物」と位置付けて対比している。ここで、占星術者による贈り物は、イエスの家族がエジ

プトで生活するためのものと Jordan の図式はみなしている。また、C におけるヘロデによるイエス誕生の阻止と、C´ におけるヘロデによるイエス復活の阻止を対比している。

ここで、まず、イエスが受けた贈り物についてである。たしかに、占星術者の贈り物は豊かな贈り物であるといえようが、アリマタヤのヨセフによる贈り物は墓であり、死者に贈られるものであって、一般的には「豊かな贈り物」とはいえまい。むしろ、双方は生きている人への贈り物と死人への贈り物という点で対照的である。また、Jordan の図式は前の贈り物をエジプトでの生活のためのものであると解釈したが、後の贈り物はイエスの復活後に活用されるものではない。

もう一つの、ヘロデが阻害しようとしたものは、前者は、イエスの誕生であり、後者はイエスの復活である。この対応については、B と B´ における、肉体の誕生と肉体を伴わない誕生という対照的關係と関連付けられるべきであり、双方は対照的であるといえる。

◆ D と D´

Jordan の図式における D と D´ では、「Descent into Egypt (エジプトへの避難)」と「Ascent into Jerusalem (エルサレムへの上京)」、「murder of children (子どもたちの殺害)」と「judgment on Jews (ユダヤに下る審判)」が対比されている。

ここで、イエスによるエジプトへの移動は、殺害から逃れるためのものであり、エルサレムへの上京は、逆に、イエスが殺害されるためのものであるので、双方は対照的である。また、「murder of children」についてみれば、子どもたちが実際に殺害される。対し、「judgment on Jews」については、審判は子どもに対するものではなく、かつ、かかる審判はあくまでも宗教的なものであり、ユダヤへの現実的な殺害はこの時点ではおこなわれない。以上の点はすべて対照的である。

◆ E と E´

Jordan の図式では、「Judea avoided (ユダヤの回避)」と「Judean ministry (ユダヤの宣教)」を対比させている。

E では、イエスはヨセフの意思により、ユダヤの地が危険であると判断し、これを回避し、ガリラヤ地方のナザレに退くこととなる。一方、E´ では、イエスは自身の意思により、ユダヤの地が危険であるという認識のもと、これを回避せず宣教のために訪問する。

◆ F と F´

Jordan の図式によれば、「Baptism of Jesus (イエスの受洗)」と「Transfiguration of Jesus (イエスの変容)」が対比されている。ただし、Jordan は、双方を対照的であるとみなしていない。

F におけるイエスの受洗の場面は次の通りである。まず、イエスは洗礼者ヨハネ¹⁷が洗礼を授ける場所であるヨルダン川に赴き、洗礼者ヨハネに受洗される。受洗後、イエスに対して天から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(日本聖書協会：1989)という声を受ける。それに対し、F´でのイエスの変貌の場面は次の通りである。イエスはペテロ・ヤコブ・ヨハネを引き連れて高い山に登る。そこでイエスの姿が変貌し、出現したモーセとエリヤと対話をする。そして天から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」(日本聖書協会：1989)という声が聞こえてくる。その後、イエスは、洗礼者ヨハネが本来はエリヤの役割を担当していたのだが、人々はそれを認めず苦しみを受けたことに言及した。ここで、F と F´ は、ともに天からの言葉「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」を受けることをテーマとしている。ただし、F の出来事の舞台は川であり、F´ の場合は高い山である。また、F では洗礼者ヨハネの行為をきっかけとして天からの言葉を受けるのだが、F´ では、洗礼者ヨハネの不在を前提に天からの言葉を受ける。以上の点は対照的である。

◆ G と G´

Jordan の図式によれば、G と G´ は「Crossing the sea (渡海)」をテーマとしている¹⁸。また、G の渡海について Jordan (1997b) は以下の説明をしている。

In the G section, we have a double crossing. First, Jesus crosses eastward to gentile territory, where He heals two Gadarene demoniac. Notice that Matthew has two; the others gospels have only one (Mark 5:1, Luke 8:26). Like Jonah, Jesus is asleep on the boat during a storm. Then Jesus crosses back into Galilee, and begins a conquest.

また、G´ については次のように書いている。

17 イエスに洗礼を施したヨハネを、本稿では便宜上「洗礼者ヨハネ」と呼ぶ。

18 ここでの「sea」は実際の「海」ではなく淡水湖であるガリラヤ湖を指す。

In the G' section, we have again two sea crossings that are contextualized with Jesus' feeding of the people. It is not hard to see G and G' as concerned with Word and Sacrament. The movement in this section is the reverse of the G section: Jesus crosses the sea into Israelite territory, and then goes back across eastward, toward Caesarea Philippi (16:13).

以上の Jordan の説明を踏まえれば、まず、G と G' ではそれぞれ 2 回の渡海がおこなわれるのであるが、G の場合は、最初は、東に向かう異邦人領への渡海であり、2 回目はガリラヤに戻るものである。それに対し、G' の場合は、最初の渡海がガリラヤ領に戻るものであり、2 回目は Caesarea Philippi¹⁹ への、東に向かう渡海である。つまり、双方は 2 回の渡海をおこなっているのであるが、そのルートは対照的である。

◆ H と H'

Jordan の図式によれば、H は「John's ministry (洗礼者ヨハネによる宣教)」であり、H' は「John's death (洗礼者ヨハネの死)」である。また、当該箇所に関する Jordan (1997b) の説明は以下の通りである。

The H and H' sections have to do with the Forerunner. Jesus describes John's work in H, and John's death is described in H' (11:2-9; 14:1-12). John's ministry and death are prophetic types of Jesus' own.

Jordan は、当該 H' について、洗礼者ヨハネの死という出来事を、イエスの死を予言するものと位置付けている。また、当該箇所を対照的なものとみなしていない。ここで、本稿は、当該箇所を神学的な観点から議論することを目的としていないので、洗礼者ヨハネの死とイエスの死の関連をかかるとする観点からはこれ以上述べないが、H' に示された洗礼者ヨハネの死は、彼が肉体を持って宣教をおこなうことの終結を意味することは明らかである。つまり、H は、洗礼者ヨハネによる肉体を持った立場での宣教活動であり、H' は、かかる活動の事実上の終結であるといえるので、この点は対照的である。

19 この場所はガリラヤ領外であり、異邦人領である。

◆ I と I´

Jordan の図式によれば、I と I´ のテーマは「Rejection of Jesus (イエスの拒絶)」である。また、Jordan (1997b) は、当該箇所について次のように説明している。

The I sections have to do with the rejection of Jesus. In the I section, Jesus condemns the cities that did not listen to John and Himself (11:20-24). In the I´ section, Jesus is rejected at Nazareth (13:53-58). Both sections stress miracles.

このように、Jordan は、かかる対応をみとめているのだが、これが対照的であるかどうかについては言及していない。

I と I´ は、イエスが人々から拒絶されることが前提であるものの、I では、拒絶する人々に対してイエスが非難することに注目されている。それに対して、I´ は、イエスの非難には注目していない。つまり I ではイエスの非難に、I´ では人々の拒絶に注目しており、双方は対照的であるといえる。

◆ J と J´

Jordan の図式によれば、J と J´ のテーマは「Gifts for the new children (幼な子たちへの贈り物)」である。Jordan (1997b) による当該箇所の説明は次の通りであり、この箇所が対照的であると述べていない。

In the J section (11:25-30), Jesus praises the Father for revealing His truth to the babes, who are the disciples.

In the J´ section (13:1-52), Jesus reveals truth to the disciples.

ここで、J では、弟子たちを幼な子とみなしたうえで、彼らに真理を解き明かされた神を賛美している。つまりイエスの視点は神に向かうものである。換言すれば、ここには、解き明かしの実際に対するイエスの解釈が書かれている。それに対し、J´ には、イエスによる弟子たちへの真理の解き明かしの実際について書かれている。つまり、J と J´ はともに「Gifts for the new children (幼な子たちへの贈り物)」なのであるが、双方には、真理の解き明かしに対する解釈（イエスの考え）と実際（イエスの行為）という差異があり、対照的であるといえる。

◆ K と K´

Jordan の図式によれば、K と K´ の対応は「Attack of Pharisees (パリサイ派の攻撃)」と「Condemnation of Pharisees (パリサイ派の非難)」である。

ここで、K・K´ には、イエスとパリサイ派の対立の様子が描かれているのであるが、K はパリサイ派によるイエスへの訴えであるのに対し、K´ は逆にイエスによるパリサイ派への訴えが述べられている。したがって双方は対照的である。

以上、Jordan の図式を裏返し構造の観点から再評価をおこなった結果、A・A´、B・B´、C・C´、D・D´、E・E´、F・F´、G・G´、H・H´、I・I´、J・J´、K・K´ のすべてが対照的な関係であることが確認された。このことは、Jordan の図式が裏返し構造であることを示している。

6. X の機能

Jordan の図式における X は、「Pharisees determine to kill the innocent Servant」であり、この箇所には、パリサイ派がイエスを殺害する決断が配置されている。換言すれば、X の以前では、パリサイ派はイエスと対立関係にあるものの、まだ殺害を決断していない。ところが、X を境に、パリサイ派はイエスの殺害に向けて進んでゆき、ついに、C´ においてそれが実行される。つまり、物語は X において転回しイエスの運命は「生」から「死」へと移行するのであり。以上は、X が、テキストの二瓶の定義に基づくクライマックスであることを示している。

7. おわりに

異郷訪問譚では、一般的に、裏返し構造がみとめられる。本稿では、新約聖書に収納された「マタイによる福音書」をテキストとし、裏返し構造に当てはめる観点による分析をおこなった。その際、最初に、本テキストが異郷訪問譚といえるか否かを、勝俣が提示した異郷訪問譚の特徴と照合することによる判別をおこなった。それによれば、テキストは、イエスを「人間」とみとめた場合には異郷訪問譚とはいえず、逆に、イエスを「神」とみなした場合には異郷訪問譚といえることが確認できた。

また、そもそも裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位の概念であるので、テキストを裏返し構造の観点から分析する際、本稿では、Jordan の図式に基づいて検証をおこなった。

Jordan (1997a) と Jordan (1997b) は、Jordan の図式が裏返し構造であるかにつ

いての言及をしていないのであるが、本稿の分析によれば、Jordanの図式にみとめられるすべての要素対が対照的な関係であることから、かかるJordanの図式は、キアスムスの下位の概念としての裏返し構造であることを確認することができた。また、上述のように、テキストは、主人公を「人間」とみなすか「神」とみなすかによって異郷訪問譚であるか否かの差異が生じる。つまり、主人公が「人間」であるという前提に立てば、本テキストに裏返し構造がみとめられることが、異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられる蓋然性以外の理由に基づくことを示唆している。一方、主人公が「神」であるという前提では、異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられる蓋然性の高さを、当該テキストにおいてみとめる知見となる。

また、4節で紹介したように、テキストには別のキアスムスであるLohrの図式、Kidderの図式もみとめられているが、これらがはたして裏返し構造であるか、については今後検証するつもりである。

引用文献

- 大喜多紀明、2017、「映画化により『借りぐらしのアリエッティ』は何を「獲得」したのか：原作小説『床下の小人たち』との対比から」『国語論集』、(14)、p. 78-92、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。
- 大喜多紀明、2020、「小山ゆう『チェンジ』にみられる裏返し構造：漫画作品における異郷訪問譚の事例」『人間生活文化研究』、(30)、p. 146-150、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多紀明、2021、「文体事象以外におけるキアスムスの様態の広がり：事例としての状況対応型リーダーシップモデル」『人文×社会』、(3)、p. 115-141、『人文×社会』編集委員会。
- 大喜多紀明、2022、「新約聖書「ペテロの第一の手紙」における裏返し構造」『北海道言語文化研究』、(20)、印刷中、北海道言語研究会。
- 大林太良、1979、「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(2)、p. 1-9、日本口承文芸学会。
- 岡本富郎、2007、「生と死の教育の必要性(3): キリスト教の死生観、特に「復活」についての考え方との関連で」『明星大学教育学研究紀要』、(22)、p. 11-24、明星大学教育学研究室。
- 勝俣隆、2009、『異郷訪問譚・来訪譚の研究：上代日本文学編』、和泉書院。
- 川村輝典、1997、「キリストは神か：ヘブライ1章8～9節の解釈をめぐる」『東京女子大学紀要論集』、47(2)、p. 31-41、東京女子大学。

- 吉良顕栄、1958、「神の子：史的イエスと神の子称号との関係をめぐって」『神学研究』、(8)、p. 90-116、関西学院大学神学研究会。
- 小島一郎、1992、「三位一体論の予備的考察」『フェリス女学院大学文学部紀要』、(27)、p. 67-81、フェリス女学院大学。
- 佐々木徹、2019、「マリア論：聖アンセルムスとエアドメルス」『茨城キリスト教大学紀要 I. 人文科学』、(53)、p. 87-105、茨城キリスト教大学。
- 二瓶弘行、2006、『“夢”の国語教室創造記：クラスすべての子どもに確かな力を』、東洋館出版社。
- 日本聖書協会、1989、『聖書』、日本聖書協会。
- 橋内幸子、1993、「TS Eliot とキリスト教 (3)- 死と復活について」『中国短期大学紀要』、中国短期大学、(24)、p. 153-164。
- 依田千百子、1982、「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(5)、p. 47-57、日本口承文芸学会。
- Assis, E. (2002). Chiasmus in Biblical Narrative: Rhetoric of Characterization. *Prooftexts*, 22(3), 273-304.
- Heath, D. M. (2011). *Chiastic structures in Hebrews: A study of form and function in Biblical discourse* (Doctoral dissertation, Stellenbosch: University of Stellenbosch).
- Jordan, J. B. (1997a). Toward a Chiastic Understanding of the Gospel According to Matthew, Part 1. *Biblical Horizons Newsletter*, (94), Online: <http://www.biblicalthorizons.com/biblical-horizons/no-94-toward-a-chiastic-understanding-of-the-gospel-according-to-matthew-part-1/>, Feb 17, 2022.
- Jordan, J. B. (1997b). Toward a Chiastic Understanding of the Gospel According to Matthew, Part 2. *Biblical Horizons Newsletter*, (95), Online: <http://www.biblicalthorizons.com/biblical-horizons/no-95-toward-a-chiastic-understanding-of-the-gospel-according-to-matthew-part-2/>, Feb 17, 2022.
- Kidder, S. J. (2015). Christ, the son of the living God: The theme of the chiastic structure of the Gospel of Matthew. *Journal of the Adventist Theological Society*, 26(2), 9.
- Lohr, C. H. (1961). Oral techniques in the Gospel of Matthew. *The Catholic Biblical Quarterly*, 403-435.
- McCoy, B. (2003). Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature. *Chafer Theological Seminary Journal*, 9(2), 17-34.

- Miller, D. L. C. (2002). *Chiastic structure in British Library Manuscript Cotton Nero Ax, Article 3* (Doctoral dissertation, University of Georgia).
- Welch, J. W. (2020). *Chiasmus in antiquity*. Wipf and Stock Publishers.
- Wolfe, K. R. (1980). The chiastic structure of Luke-Acts and some implications for worship. *Southwestern journal of theology*, 22(2), 60–71.